江陽中

自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成

～対話的・協働的活動を通して～

（３年計画の３年次）

校長　富　樫　克　輝

１　研究主題について

本校では平成 27 年度～ 29 年度まで八戸市学校保健会研究指定校として「ピアサポート活動」に取り組んだ。これは、先生や親には言いづらいことやちょっとした悩みや心配事がある時に、生徒同士という「気がねのない仲間」が相談にのったり、サポートしたりする温かい関係づくりを推進する取組だった。そして、この土壌を足がかりに一昨年度からは、主体的に考え、発言する態度や意識を引き出すために、授業におけるコミュニケーション能力の向上を目指して研究に取り組んできた。グループ活動などの共有場面を効果的に設定することで、自分の考えを積極的に発表しようとする生徒が増えてくると考えて研究を進めてきた。しかし、コロナ禍においては協働作業の場面で制限されることが多く、対話する機会が減り、生徒が互いの学びを共有しながら深い学び合いにもっていく授業形態にすることが難しくなった。話合い活動を通して自分の意見をしっかりと述べること、相手の立場を考え、共感することの大切さを認識し、安心して自分の考えを述べること、仲間の意見を聴き、認め合える集団の形成ができるように、感染対策を取りながらも「ピアサポート活動」の精神に立ち返り、取組を見直していきたい。また、生徒の成長している部分を学力の定着につなげていくためには、授業規律の徹底も大事な要素となってくる。「磨き合い、高め合い、深い意見交換する」ことができるようになるための効果的なＩＣＴの活用も本校の課題である。

以上のことから、コミュニケーション能力の向上による学びの深まりを目指すにあたり、自分の意見が仲間に認められ、更に磨き磨かれる経験を積み重ねることが自信となり、それが共に学び、深め合う態度を強化して、一層の学力の定着・向上につながると考え、研究主題を継続して設定する。

２　研究のねらい

「仲間と認め合い、支え合い、高め合う」ピアサポート活動の手法の見直しと学習活動への応用を図り、各教科や各領域において生徒が主体的に自分の考えや意見をもち、共に学び、深め合う学習への意欲を高めるための活動や授業形態などについて実践を通して研究する。

３　研究仮説

授業の中で発言の交流、共有場面を効果的に設定することで、「ピアサポート活動」により身に付いた表現力、コミュニケーション能力を発揮できる。その結果、生徒の学習に取り組む姿勢や態度が主体的になり、共に学び、深め合う基本的な学習基盤を身に付けることができる。

４　研究内容

(1) 「学習六則」を徹底させる。また、取り組み状況を定期的、継続的に評価し、改善に努める。
(2) 各教科や各領域において、対話的・協働的活動場面を効果的に設定する。
(3) 授業内で、導入から課題設定までの工夫を行う。
(4) 教員間の授業内共通理解項目を設定し、指導技術の向上を図る。（相互参観、ＩＣＴ研修）

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	授　業　研　究	全　体　会　等
4	5	第１回校内研修 第２回校内研修	今年度の研究についての共通理解 研究テーマ及び研修計画について 授業配信のポイントの共通理解
5		ＩＣＴ講習	
6		第３回校内研修 相互参観授業	指導案の書き方の共通理解
7		相互参観授業	
11		相互参観授業	
2		第６回校内研修	研修のまとめ（今年度の成果と課題）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
7	２１	一般研修等支援「授業の導入から課題設定までの工夫について」 八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　福田　秀貴様
8	２２	第４回校内研修　PSC 研修(川井範子氏による講話)
12		第５回校内研修　ＩＣＴ講習→職員会議の後などに分けて実施

６　研究の成果

(1) 学習六則や指導上の共通事項を確認し、１年生では、毎時間、毎日教科担任に授業への取り組み状況を継続的に評価してもらい、改善に努めることができた。PSC 研修では原点に返り、全職員で講話を聞くことにより、授業や行事、日常生活の中での認め合う場面や話し合う場面を意識して設定するようになった。生徒対象の授業アンケート「間違いを気にせずに手をあげたり、意見発表したりできる雰囲気がある。」において昨年度の７７％から８０％に上昇した。また、ＩＣＴ講習は短い時間で分けながら、必要な時に随時行うことができた。

(2) 全校でリーダーの生徒を主体として、PSC 活動を行うことができた。その中で小規模校の強みを生かして、縦の繋がりをもつことができた。地域の方々を交えてのグループでの話合い活動の場で、PSC 活動の取組が発揮されて、生徒のコミュニケーション能力の成長を感じることができた。

７　研究の課題

コロナ感染の流行の状況によっては協働作業の場が制限されることが多く、生徒がお互いの知識を共有しながら深い学び合いにもっていく授業形態の設定が難しい時期があった。生徒１人１台端末を使用しての画面内で意見交流をすることで、相手の意見を吸収し、深い学びにつなげていくことを図ったが、１人１台端末の有効な活用法や授業形態については更なる工夫が必要である。

（記入者　小山　牧子）